

## 要素命題と論理空間：移行期ウィトゲンシュタインの思想について

林, 大悟  
九州大学大学院人文科学研究院哲学部門：助手

<https://doi.org/10.15017/3614>

---

出版情報：哲學年報. 66, pp.99-113, 2007-03-01. 九州大学大学院人文科学研究院  
バージョン：  
権利関係：

# 要素命題と論理空間

— 移行期ウイトゲンシュタインの思想について —

林 大 悟

## 序

「私は以前、要素命題について二つの表象を持っていた。・・・第二に私は、要素命題は相互に独立でなくてはならないという表象を持っていた。・・・ここにおいて私は誤っていた」(WWK, S.73, 1930.1.2)<sup>①</sup>。一九二九年に哲学復帰した後のいわゆる移行期ウイトゲンシュタインは、要素命題が相互独立であるという『論理哲学論考』<sup>②</sup>の思想を誤りとみなした。要素命題の相互独立性の放棄を一九三〇年一月二日のウイトゲンシュタインはこのように語る。

従来の解釈は、要素命題の相互独立性の放棄を『論考』6.3751における色命題の問題、即ち「色排除問題」<sup>③</sup>の帰結とみなす。しかし、要素命題の相互独立性に関して別の形で言及するテキストがある。『哲学的考察』<sup>④</sup>83節は以下のように語る。

『要素命題』の概念は今や以前の意味を全く失っている。・・・記述の独立な座標の概念。例えば『かつ』によって結合される諸命題は互いに独立ではなく、それらは一つの像を形成し、それらの両立可能性や両立不可能性が吟味される。／要素命題の私の古い見解において、座標の値の規定は存在しなかった。色のある物体が色空間の中にあるという私の考察が私をすぐにそこへ導くことができただろうにもかかわらず」(DB, §83)。

これは要素命題の相互独立性と、それを成立させている論理空間という『論考』の基本的な枠組みに定位した考察である。従来の解釈が注目するような色排除問題も論理空間の問題として捉えない限り、ウイトゲンシュタインの思想の変遷に関する本質的な問題の射程を捉えることができない。それ故、本稿は中期ウイトゲンシュタインにおける要素命題の相互独立性の否定を、色排除問題として捉える従来の解釈では説明できないことを示し(一)、『哲学的考察』83節を論拠に、論理空間に定位して解釈する(二)。そして多次元空間としての論理空間が『論考』の根本思想であることを示し(三)、それが中期ウイトゲンシュタインをも規定する根本思想であることを証明したい(四)。

## 一 色排除問題

要素命題が相互に独立でなければならないという思想は『論考』において以下のように語られる。「要素命題のしるしは、いかなる要素命題もそれと矛盾しないということである」(421)。「ある要素命題から、他のいかなる要素命題も演繹され得ない」(513a)。従来の解釈は要素命題の相互独立性の放棄を「色排除問題」として解釈する。そのときに参照されるテキストは、「論理形式について」<sup>(5)</sup>や『哲学的考察』における以下のような考察である。「例えば明るさの単位を $b$ と呼び、存在者 $E$ がこの明るさを持つという言明を $E(b)$ と呼ぼう。この時 $E$ が二度の明るさを持つと語る命題 $E(b)$ は、 $E(b) \& E(b)$ という論理積に分析可能とされるだろう。しかしこれは $E(b)$ に等しい。他方、もし我々が単位の間の区別を試みて、それ故 $E(2b) = E(b) \& E(b)$ と書くとするならば、我々は二つの異なる明るさの単位を想定することになる。そしてこの場合、もし存在者が一つの単位を持つのであれば、 $a \cdot b$ か $b \cdot a$ かの二つのうちのどちらが単位なのかという問いが生じる。これは明らかに馬鹿げている」(PO, pp.32-33, cf. PB, §76)。これは色命題(度合を持つ性質について言及する命題)の分析不可能性についての考察である。『論考』6.3751<sup>(6)</sup>において、「視野の一点が赤い」などの色命題は、例えば「視野の一点が青い」と矛盾するが故に、要素命題の相互独立性の要請に

反し、要素命題ではないと位置付けられた。しかし、分析可能とみなされていた色命題<sup>7</sup>が、一九二九年以降は分析不可能とみなされるようになる。存在者Eが二度の明るさを持つという命題 $E(2b)$ を $E(b) \cdot E(b)$ と分析しても $E(b)$ と同じ真理値をとるし、 $E(2b)(E(b) \cdot E(b))$ という形で二つの単位を導入しても存在者Eは異なる二つの単位を持つことになるからである。このような考察から、色命題は要素命題であると位置付けられるようになる。そして色命題は相互に排除するので、要素命題の相互独立性という考えが否定されるといっているのである。

このような解釈によると、ハッカーが指摘するように、要素命題の相互独立性の放棄が「色排除問題」という「些細な問題」<sup>8</sup>から生じたことになるだろう。確かにこのような考察は要素命題の相互独立性の否定という論点のきつかけにはなっているかもしれない。しかしこのような些細な問題に基づいた解釈は要素命題が相互独立であるという『論考』の基本思想の放棄を説明できない。まず、色命題が分析不可能であり相互排除するという見解をとったとしても、色命題を要素命題とみなす選択と同様に要素命題でないとみなす選択も可能である。色排除問題からは色命題を要素命題とみなすという選択は論理的には帰結しない。むしろ『論考』は、相互独立性であることを要素命題の基準とするのであり(TLP, 4.21)、<sup>9</sup> 諸対象に対応する名と名の配置を要素命題と規定している (TLP, 3.21, 4.22)。色命題が相互独立でないことは『論考』のワイトゲンシュタインも語っているし、「視野の一つの点が赤い」という命題は少なくとも視野の点という一つの対象の性質の記述であり名と名の配置という要素命題の規定に反する。色命題は『論考』の要素命題の基準を満たしていない。さらに『論考』のワイトゲンシュタインは要素命題が具体的に何であるかは予見できないという態度を取る。<sup>10</sup> つまり色命題を要素命題とみなす必然性はないし、『論考』の立場からはむしろ色命題が要素命題ではないとする態度が帰結するはずである。色排除問題に定位置した解釈はなぜ要素命題の相互独立性が放棄され、色命題が要素命題とみなされるのかを説明できない。他の強力な理由が存在するはずである。

## 二 論理空間と要素命題の相互独立性

その理由は論理空間という『論考』の根本思想であり、それによって要素命題の相互独立性という思想が捨てられたのである。要素命題の相互独立性を放棄する本質的な理由は『哲学的考察』83節で語られている。ここでは論理空間と要素命題の相互独立性の關係についての考察がなされている。要素命題の相互独立性の放棄を『論考』の内部の問題として押さえなければならぬ。『哲学的考察』83節をもう一度引用しよう。

「『要素命題』の概念は今や以前の意味を全く失っている。……記述の独立な座標の概念。例えば『かつ』によって結合される諸命題は互いに独立ではなく、それらは一つの像を形成し、それらの両立可能性や両立不可能性が吟味される。／要素命題の私の古い見解において、座標の値の規定は存在しなかった。色のある物体が色空間(Farbenraum)の中にあるという私の考察が私をすぐにそこへ導くことができただろうにもかかわらず」(PB, §83)。「かつ」によって結合される諸命題とは命題結合子によって結合される要素命題である。このような諸命題が互いに独立でないという主張は要素命題の相互独立性の否定を意味する。ここで要素命題に関する座標の規定が「色のある物体が色空間の中にあるという私の考察」から帰結したはずだったのとウイトゲンシュタインは回顧している。それは『論考』20131の考察である。「視野における斑点は赤である必要はないが、一つの色を持つのでなければならぬ。視野における斑点はいわば色空間(Farbenraum)を自分のまわりに持っている。音は一つの高さを持つのでなければならず、触覚の対象は一つの硬さを持つのでなければならぬ、等」(TLP, 20131)。この主張は一つの色・音・触覚の対象が、色空間・高さ空間・硬さ空間、即ち論理空間のうちに位置を持つというものである。論理空間についての考察から論理空間の持つ座標の規定が帰結し、それが即座に要素命題の相互独立性の否定へと導くことができたと振り返っている。論理空間の座標の規定という考えは『論考』342から帰結する。

「命題は論理空間(logischer Raum)における場所を決定する」(TLP, 3.4)が、「命題が論理空間の一つの場所だけを決定することが許されているにもかかわらず、その命題によってすでに全論理空間が与えられているのでなければならぬ」(TLP, 3.42)。ある命題を述べること、論理空間のなかの一つの場所を決めることである。その時すでに、論理空間全体が与えられているのでなければならぬと『論考』は主張する。論理空間のなかの一つの場所を決めることは論理空間における座標の一つの場所を占めることである。<sup>11)</sup>そして命題によって論理空間における座標の一つの場所を決定するためには、他のすべての座標が既に与えられていなければならぬ。論理空間における座標という特性は、ある命題による他の命題の排除、ある命題からの他の命題の推論を可能にさせる。この論理空間の持つ性質は、「要素命題のしるしは、いかなる要素命題もそれと矛盾しないということである」(TLP, 4.211)、「ある要素命題から、他のいかなる要素命題も演繹され得ない」(TLP, 5.134)という要素命題の相互独立性と矛盾する。『哲学的考察』83節が要素命題の相互独立性という思想を放棄する理由を「色のある物体が色空間の中にあるという私の考察が私をすくにそこへ導くことができただろう」と語るのはこの論点である。要素命題の相互独立性は、座標という論理空間一般のもつ性質によって否定される。これこそが要素命題の相互独立性が放棄された理由である。要素命題の相互独立性の否定の本質は、『論考』内部における要素命題の相互独立性と論理空間との矛盾にある。論理空間という『論考』の思想が『論考』の要素命題の相互独立性という思想を放棄させるのである。

### 三 『論考』の根本思想としての論理空間

論理空間が要素命題の相互独立性を否定するのは論理空間こそが『論考』の根本思想に位置するからである。『論考』は要素命題の存在と要素命題の真理関数を基本思想として持つが、このような基本思想を可能にするのは論理空間である。本稿の冒頭に引用した一九三〇年一月二日の発言をもう一度振り返ろう。「私は以前、要素命題について二つ

の表象を持つていた。・・・私の第一の想定は、我々は命題の分析によって結局は論理定項の助けを借りない諸対象の直接的な結合である命題に到達しなければならぬという想定である・・・私は今でもこのことに固執している。第二に私は、要素命題は相互に独立でなくてはならないという表象を持つていた。完全な世界記述はいわば、一部は肯定的であり、一部は否定的であるところの要素命題の積であるだろうという表象を持つていた。ここにおいて私は誤っていた」(WWK, S.73)。「論理定項の助けを借りない諸対象の直接的な結合である命題」は「要素命題」である。ここで要素命題に関して、「命題の分析によって要素命題に至る」、「要素命題が相互に独立でなければならない」という二つの見解が提示されている。この二つの見解は要素命題と要素命題の真理関数という『論考』の二つの基本思想に対応している。

『論考』4.221は以下のように語る。「我々が命題の分析に際して直接の結合における名からなる要素命題に達しなければならぬ、ということとは明らかである。／ここで、いかにして命題結合が成立するのかが問われる」(TLP, 4.221)。「命題の分析の結果要素命題に至ること」と「いかにして命題結合が成立するか」が二つの課題として挙げられている。『論考』は要素命題に至ることと命題結合を二つの基本思想とする。命題結合とは要素命題を構成単位としてそこから複雑な命題をつくる要素命題の真理関数を意味する<sup>16)</sup>。要素命題の真理関数は要素命題の相互独立性を前提する。『論考』は相互に独立な要素命題を単位とした命題結合によってあらゆる命題を生成させる。それ故、『論考』は「すべての真なる要素命題の陳述は、世界を完全に記述する。世界はどの要素命題が真でありどの要素命題が偽であるかの陳述を加えた、すべての要素命題の陳述によって完全に記述される」(TLP, 4.26)と主張する。先に引用した一九三〇年のワイトゲンシュタインも「要素命題は相互に独立でなくてはならない」という発言に続けて、「完全な世界記述はいわば、一部は肯定的であり、一部は否定的であるところの要素命題の積であるだろう」(WWK, S.73)と語る。ここでもすべての真なる要素命題とすべての否定を伴った要素命題の連言によって完全な世界記述がなされ

るといふ真理関数が想定されている。

このような要素命題の存在と要素命題の真理関数という基本思想を可能にする大前提が「論理空間」である。『論考』は「世界は成立しているもの全てである」(TLP, 2)というテーゼとともに始まるが、「論理空間における諸事実が世界」(TLP, 1.13)である。「世界」の定義の中にすでに「論理空間」が登場していることは重要である。これは論理空間なしに『論考』の論理が語れないことを意味する。『論考』は論理空間の内にある事実(事態、命題)についての論理である。

論理空間という想定が、あらゆる現実を命題によって写像すること、「論理像が世界を写像しうる」(TLP, 2.19)ことを可能にする。なぜなら、命題は像として「論理空間における状態を、諸事態の存立非存立を描出する」(TLP, 2.11)が、「例えばどんな像も空間的像であるわけではない」(TLP, 2.182)からである。命題はあらゆる現実を描出するが、そのためには現実の空間的な配置の像だけでなく、色や音、硬さなど様々な現実についての像が可能でなければならない。「像は像がその形式を持っていて全ての現実を写像する。／空間的な像は全ての空間的なものを、有色的な像は全ての有色的なものを写像する、等」(TLP, 2.171)。そのためには、命題が現実と同じだけの「論理的多様性」をもたなければならない。「命題においては、命題が描出する状態においてとまさに同じだけのものが区別されなければならない。／両者は同じ論理的(数学的)多様性を所有するのでなければならない」(TLP, 4.04)。それ故『論考』は多次元空間としての論理空間を想定する。命題と現実がその中にあるところの論理空間の次元として、「色空間」「音の」高さ空間」「硬さ空間」(TLP, 2.0131)などが論理空間の次元を構成する。事態と命題が同じ多次元の論理空間のうちにあるという思想のもとで、論理像としての命題があらゆる現実を描出することができる。「特定の数の次元を備えた記号体系—特定の数学的多様性(Mannigfaltigkeit)を備えた記号体系—を形成することのみが重要である」(TLP, 5.475)。論



理論空間はこのような多次元多様体(Mannigfaltigkeit)として想定される<sup>13)</sup>。理論空間という想定は『原—論考』<sup>14)</sup>でも全く同じように登場する。例えば『原—論考』113において「理論空間における事実が世界である」と言われ、211において「像は理論空間における状態を、諸事態の存立と非存立を描出する」と言われる。その他『論考』における理論空間に関する箇所はすべて既に『原—論考』の中に登場している<sup>15)</sup>。このことは理論空間という思想がはじめて『論考』の世界を可能にすることを意味する。『論理哲学論考』はLogisch-Philosophische Abhandlungであるが、このLogischとは理論空間を意味する。『論考』の論理はすべて理論空間が可能にするのである。理論空間という根本思想が、事態の論理像としての「要素命題」と、「要素命題の真理関数」という『論考』の基本思想を可能にするのである<sup>16)</sup>。

#### 四 移行期ワイトゲンシュタインと理論空間

理論空間は『論考』を可能にする根本思想であり(三)、理論空間が哲学復帰後のワイトゲンシュタインに要素命題の相互独立性の主張を放棄させた(二)。それは『論考』の理論空間を哲学復帰後のワイトゲンシュタインも一貫して根本思想としているからである。このことを証明しよう。『論考』は理論空間について「それ〔視野における斑点〕はいわば色空間を自分のまわりに持っている(er hat ... den Farbenraum um sich)」。音は一つの高さを持つのでならねばならず、触覚の対象は一つの硬さを持つのでなければならぬ、等」(TLP, 2013I)と語る。哲学復帰後のワイトゲンシュタインもこれと全く同じ主張を同じ形で一九三〇年一月五日に繰り返し返している。「ものは色空間を自分のまわりに(das Ding hat einen Farbenraum um sich)」、硬さ空間等々を自分のまわりに持つている」(WVK, S.89, 1930.1.5)。両者なごもにden Farbenraum um sich haben という形で全く同じ表現で同じ内容を語っている。このことは理論空間という思想を哲学復帰後のワイトゲンシュタインが保持していることを意味する。

哲学復帰後も一貫して保持される論理空間は、『論考』と同じく一つの多次元空間として特徴付けられる。一九三〇年一月五日のウイトゲンシュタインは「非常に多くの定項が命題のなかに現れる、その次元の多さだけ命題は異なる。それだけ多くの次元を命題がその中にあるところの空間は持つ。／命題は全論理空間(ganzer logischer Raum)に手をやしのべる」(WWK, S.91, 1930.1.5)と語る。「命題のなかに現れる定項」とは命題の中に現れる語であり、それは現実の対象を指示する。命題が表現する現実と同じだけの多様性を命題はもつのであり、命題がその中に位置を持つところの空間、即ち論理空間はそれだけの次元を備えていると主張されている。論理空間が「多くの次元(Dimension)」を持つという主張は、『論考』の「命題においては、命題が描出する状態においてとまさに同じだけのものが区別されなければならない。／両者は同じ論理的(数学的)多様性を所有するのでなければならぬ」(TLP, 404)、「特定の数の次元(Dimension)を備えた記号体系—特定の数学的多様性を備えた記号体系—を形成することのみが重要である」(TLP, 5475)という多次元空間としての論理空間の規定と全く同じである。「命題は全論理空間に手をやしのべる(Der Satz durchgreift den ganzen logischen Raum)」(WWK, S.91, 1930.1.5)という表現も、『草稿』や『論考』から一貫して用いられている。『草稿』は「命題は全論理空間に手をやしのべなければならぬ(Der Satz muß den ganzen logischen Raum durchgreifen)」(NB, 1914.12.16)と言ひ、『論考』は「命題は全論理空間に手をやしのべる(Der Satz durchgreift den ganzen logischen Raum)」(TLP, 342)と語る。Der Satz durchgreift den ganzen logischen Raumという主張は『草稿』から一貫した全く同じものである。それが一貫して語られるのは「命題が論理空間の一つの場所だけを決定することが許されているにもかかわらず、その命題によってすでに全論理空間(ganzer logischer Raum)が与えられているのでなければならぬ」(TLP, 342)という論理空間の性質が哲学復帰後も重要な位置を持つからである。「私が『私は胃痛をもたない』と語ったとき、私はいわば『私は胃痛空間の零点にいる』と語っているのである。しかし、命題は既に全論理空間(ganzer logischer Raum)を前提

するのである」(WWK, S.85-86, 1930.1.5)。このように哲学復帰後のウイトゲンシュタインも多次元空間としての論理空間という思想を保持しているのである。

『考察』や『ウイトゲンシュタインとウィーン学団』では論理空間の含む多様な次元が「色空間」(WWK, S.89, P.B. S.1, S.38, S.83)「長さ空間」(WWK, S.89)「硬さ空間」(WWK, S.89)「胃痛空間」(WWK, S.85-86)「金空間」(WWK, S.67)「気温空間」(WWK, S.86)「聴空間」(P.B. S.42)「明—暗—空間 (より明るいとより暗いという空間)」(P.B. S.42, S.45)「騒—静—空間」(P.B. S.45)等と例示される。しかし、例えばものの色と空間的な位置にのみ言及する命題「ここにある点は赤い」において、このような多次元から構成される全論理空間が前提され、同時にあてがわれるということは一見奇妙に思われるかもしれない。しかし、この命題はそれ以外の座標系の値を0として述べることと同値であり、それを捨象して語ることも同値である。これは例えば、数学において三次元空間について考察する際に、その一つの座標軸の値が0をとるのであれば、そこから二次元の平面のみを取り出して(一次元捨象して)考察することと同じである。

哲学復帰後のウイトゲンシュタインはこの「全論理空間」を「命題体系」という概念として言い換える。「長さについてのどんな言明も一つの体系の中にある。なぜなら、もし私があるものが3 mの長さであることを理解しているのなら、私はまた、それが5 mの長さであるということが何を意味しているかをも理解しているからである。この言明はすでに可能な長さの空間の中にある。同様にものは色空間を自分のまわりに、硬さ空間等々を自分のまわりに持っている。私がこのことをかきつけて書いたときには、私はこの空間の場所の数がいわば物差しが目盛り線を構成し、そして我々が常に全体系(ganzes System)を物差しのように現実にあてがう、ということをつかっていた」(WWK, S.89, 1930.1.5)。「あるものが3 mの長さである」という言明は、「あるものが5 mの長さでない」「6 mの長さでない」ということを論理的に含意する。長さ空間の場所の数が目盛り線を構成し、その目盛り線全体(長

さの体系)が現実と比較される。このような目盛り(座標)をもつ長さ空間、色空間、硬さ空間などが「物差し」として表象され、その「全体系」が現実にあてがわれると主張される。「命題の全体系を物差しとして現実にあてがう」というこの主張は「ある命題が既に全論理空間を前提する」という『論考』の主張と一致する。「物差しとしての命題体系」は論理空間の座標の性質を具象化したものにほかならない。ある命題を述べることによつて体系全体が現実と比較されるが、この物差しとしての体系は全ての命題がそこに含まれる一つの命題体系、即ち一つの多次元の論理空間である。「あらゆる命題は物差しのように現実にあてがわれる一つの命題体系(ein Satzsystem)のなかにある。(論理空間(logischer Raum))」(WWK, S.76, 1930.1.2)。

確かに物差しとの比喩は『論考』でも語られている。「像は物差しのように現実にあてがわれている」(TLP, 2.1512)。<sup>1)</sup>しかし、ここでは対象の配置に対応する要素命題の二つの点(名)の配置が物差しと喩えられている。「目盛線の外側の点のみが測るべき対象に接している」(TLP, 2.1512)。<sup>2)</sup>これに対して中期ウイトゲンシュタインは一つの命題ではなく、命題体系(論理空間全体)を物差しとして喩えている。「私は命題を物差しとして現実にあてがうのではなく、命題の体系を物差しとして現実にあてがうのである」(PB, §82)。<sup>3)</sup>それ故「命題はこの場合、私が以前信じていたことよりもいっそう物差しに似ている」(PB, §82)と語られるのである。論理空間の持つ座標という性質によつて現実と命題の関係が明晰になる。ある命題を述べることは、その物差しとしての全命題体系、即ち全論理空間を現実と比較していることを意味する。論理空間の持つこの意味を『論考』当時には「分かっていなかった」と一九二九年以後繰り返し強調されるのはそのためである。<sup>4)</sup>

以上の考察から論理空間がウイトゲンシュタインの考察を規定する主導概念であったことが明らかであろう。座標という考えや物差しとしての命題体系という考えは哲学復帰後に新たに生まれた思想ではなく、『論考』の論理空間一般の構造を明晰化したものである。中期ウイトゲンシュタインの思考を突き動かしたのは論理空間という『論考』

の根本思想である。

## 結論

本稿は論理空間に定位してウイトゲンシュタインの思想の変遷を捉えることを試みた。移行期ウイトゲンシュタインは、座標の規定という論理空間の構造を明晰化することによって要素命題の相互独立性を改めて否定する。論理空間という『論考』の根本思想が要素命題の相互独立性を放棄させるのである。

このことは、なぜ色命題が要素命題とみなされるようになったかという問題にも解答を与えるだろう。同一座標系における値が相互排除するという規定は論理空間一般に妥当する。現実を描出するあらゆる要素命題はこのような座標のうちに位置を持つ。それ故色空間の座標のうちにある色命題も同様に要素命題と位置付けられる。論理空間という根本思想が、要素命題の相互独立性の放棄と色命題を要素命題とみなすことを同時にもたらしたのである。

中期ウイトゲンシュタインは、要素命題の存在を否定しないが、要素命題の相互独立性は否定する。それは要素命題の真理関数の放棄を意味する。しかしそれは論理空間という根本思想のもとにある一つの基本思想の放棄にすぎない。一般には一九二九年以降は『論考』の思想の解体や『論考』からの訣別と位置付けられる<sup>18)</sup>。しかし、彼の思考を動かした中心概念は論理空間という『論考』の根本思想である。この意味で、中期ウイトゲンシュタインの思想は、『論考』からの訣別ではなく、『論考』の思想の明晰化という地平のうちに位置付けられるだろう。

論理空間に定位した解釈はさらなる展望を与えるだろう。命題は命題が記述するものと同じ「論理形式」「論理的多様性」をもつと主張するウイトゲンシュタインに対して、スラッファがナポリ風の軽蔑の仕草を見せ、「これの論理形式は何だ？」と尋ねたという有名なエピソードがある。それによって「命題が現実の像である」という考えが捨てられたと言われている<sup>19)</sup>。論理空間は論理像としての命題が現実と論理形式・論理的多様性を共有するという考えを

可能にし、命題と現実の接点を保障する。命題が現実の像であるという思想の放棄の本質は論理空間の放棄である。これは命題と現実との結合に固執していたウィトゲンシュタインにとって決定的な思想の転換であり、『論考』からの訣別を意味する<sup>⑩</sup>。論理空間の放棄によって『論考』の世界が一举に崩壊するのであり、それによって『哲学探究』の世界が開かれる<sup>⑪</sup>。論理空間こそがウィトゲンシュタインの思想の転換がそれを巡ってなされる鍵概念なのである。

## 注

- (1) Wittgenstein, L., *Wittgenstein und der Wiener Kreis*, Werkausgabe Band3, Suhrkamp, 1984. 本稿では『WWK』略記としてページ数及び日付を付する。
- (2) Wittgenstein, L., *Tractatus logico-philosophicus*, Werkausgabe Band1, Suhrkamp, 1984. 本稿では『論考』TLP』略記とする。
- (3) Hacker, P.M.S., *Insight and Illusion: Themes in the Philosophy of Wittgenstein*, Revised and corrected 1986 edition, Thoennes Press, 1997, p.108 (本稿ではHacker』略記とする)；cf. Glock, H.-J., *A Wittgenstein Dictionary*, Blackwell, 1996, p.82, Malcolm, N., Wittgenstein's *Philosophische Bemerkungen*, *The Philosophical Review*, 76, 1967, pp.220-221.
- (4) Wittgenstein, L., *Philosophische Bemerkungen*, Werkausgabe Band2, Suhrkamp, 1984. 本稿ではPB』略記として節番号を付す。
- (5) Wittgenstein, L., 'Some Remarks on Logical Form', *Philosophical Occasions 1912-1951*, Hackett Publishing, 1993, pp.29-35. 本稿ではPO』略記する。
- (6) 例えば、二つの色が同時に視野の一つの場所にあることは不可能。しかも論理的に不可能である。・・・(二つの要素命題の論理積がトートロジーでも矛盾でもありえないということ)は明らかである。視野の一つの点が同時に二つの異なる色をもつという言明は矛盾である。(TLP, 6.3751)。
- (7) さて、—私が考えていたように—度合についての言明が分析可能だとすると、我々はこの矛盾を色RはRのすべての度合を含むがBの度合を全く含まない、色BはBのすべての度合を含むがRの度合を全く含まないと語ることによって説明することができただろう。(PO, p.33)。
- (8) 「彼が一九二九年に哲学に復帰した後の彼の仕事は、二つの一般的な目的を遂行することを含んだ。批判的で破壊的な仕事は、『論

- 考』の哲学の大部分を取り壊すこと、『論考』の言語像に備わっている欠陥の詳細な精査に関係していた。・・・しかしながら、ウィトゲンシュタイン自身にとって、欠陥は一見些細なこと、すなわち限定可能者の限定辞の相互排除から暴かれた(Hacker, p.108)。
- (9) 「この青い色とあの『青い色』は自ずからより明るいより暗いの内的関係にある」(TLP, 4.123) 「二つの色が同時に視野の一つの場所にあることは、不可能。しかも論理的に不可能である」(TLP, 6.3751)。
- (10) 「今や私は思う。要素命題の全領域については或る原理が支配する。そしてそれはこのようになる。要素命題の形式は予見やれない。・・・何がそこに現れうる全てのものであるかを我々は今日仮定することは不可能である」(WWK, S.42, 1929.12.22)。  
Cf. WWK, S.182, P.O, p.30, Wittgenstein, L., *Notebooks 1914-1916*, 2nd ed. von Wright, G.H. and Anscombe, G.E.M. eds., Blackwell, 1979, p.130. (本稿ではNBと略記し付記を省く) Malcolm, N., *Ludwig Wittgenstein: A Memoir*, second edition, Clarendon Press, Oxford, 2001, p.70.
- (11) 「空間内の点が存在しなければ、その座標も存在しない。そして座標が存在すれば、点もまた存在する。論理においてはこのようないかなる場合である」(NB, 1915.6.21)。
- (12) 「上述の事例では、如何に諸命題が互いに結びついているか、如何に命題—結合が成立するかについて述べるのが重要である」(NB, 1914.9.20)。「命題は要素命題の真理関数である」(TLP, 5)。
- (13) 細川亮一、『形而上学者ウィトゲンシュタイン』、筑摩書房、二〇〇二年、九五頁を参照。事態の「論理像」を可能にする数学モデルに依拠した多次元多様体としての論理空間の解釈については、拙稿「ウィトゲンシュタインにおける論理空間」(『哲学論文集』第四十一輯、九州大学哲学会編、二〇〇五年、二五—四〇頁)を参照されたし。
- (14) Wittgenstein, L., *Prototractatus An early version of Tractatus Logico-Philosophicus*, Routledge & Kegan Paul, 1971. 本稿ではPTと略記する。
- (15) 『原—論考』におけるその他の論理空間に関する言及は以下の通りである。「像は論理空間における可能な状態を描出する」(PT, 2.202)。「命題は論理空間における場所を決定する。この論理の場所の存在は構成要素の存在によってのみ、すなわち有意義な命題の存在によって、保証されている」(PT, 3.2101)。「命題が論理空間の一つの場所だけを決定することが許されているにもかかわらず、その命題によって既に全論理空間が与えられているのでなければならない。(さもないと否定、論理和、論理積などによって、常に新たな要素が—等位に—導入されるのである)」(PT, 3.2104)。「像をめぐる論理的な足場は論理空間を決定する」(PT, 3.2141)。「命題は全論理空間に手をさしのぐる」(PT, 3.2142)。「オートロシーは現実に対して、全—無限の—論理空間を(自由に)許す。矛盾は全論理空間を満たす、そして現実にとつていかなる点をも許さない。それゆえ、両者のどちらも、現実を何らかの仕方規定

- すなわち「できなう」(PT, 4.4485)。
- (16) 『形而上学書「ウィトゲンシュタイン」』、二二四—二二五頁を参照。
- (17) cf. WVK, S.64, S.73-74, S.89.
- (18) 「彼が一九二九年に哲学に復帰した後の彼の仕事は、二つの一般的な目的を遂行することを含んだ。批判的で破壊的な仕事は、『論考』の哲学の大部分を取り壊すこと、『論考』の言語像に備わっている欠陥の詳細な精査に関係していた」(Hacker, p.108)。
- (19) Malcolm, N., *Ludwig Wittgenstein: A Memoir*, Oxford University Press, 1984, pp.57-58.
- (20) 「ウィトゲンシュタインは、スラッファとの議論ですべての枝が切り取られた木のように感じたと、多くの友人に語った」(Monk, R., *Ludwig Wittgenstein The Duty of Genius*, Jonathan Cape, 1990, p.261)。
- (21) 「私はこの大学の教師であるP・スラッファ氏が多くの年月を通じて絶え間なく私の思想に対して行った批判のおかげをこうもっている。私はこの励ましにこの著作の最も重要な考えのおかげをこうもっている」(Wittgenstein, L., *Philosophische Untersuchungen*, Werkausgabe Band1, Suhrkamp, 1984, Vorwort)。